

献 辞

経済学部での研究・教育に長きにわたってご尽力いただいた徳田賢二教授が定年を迎えられ、2030（平成30）年3月末をもって専修大学を退職されることとなりました。私たち経済学部スタッフ一同は、これまでのご功績に対して『専修大学経済学論集』第52巻第3号（通巻129号）を「徳田賢二教授退職記念号」として呈上し、衷心より感謝の意を表したいと思います。

徳田賢二教授は、1972年に一橋大学経済部を卒業後、日本長期信用銀行での十数年の勤務の後、1989年4月に専修大学経済学部助教授として入職され、その後、1995年4月に経済学部教授に昇格されました。主にご担当いただいたのは、経済学部での「地域経済論」「流通経済論」「ゼミナール」、大学院経済学研究科での「都市政策論」「流通システム論」、大学院特別講座：KS（川崎・専修）ソーシャル・ビジネスアカデミー」（アカデミー長）でした。教育、とりわけゼミナールでは、新百合ヶ丘フードフェスティバルや多摩区長沢商店会まちづくりという地域活動に長年参加され、地域という現場に学生たちを誘う独自のゼミナール活動を展開されました。さらに、学内行政上の役職として、二部学生部委員、学生部次長、二部教務委員長、大学院委員会委員、大学院経済学研究科長、学校法人専修大学評議員等々を歴任されました。

徳田教授の研究経過をふりかえってみると、その成果として、地域経済論・流通経済論・企業経営論という3つの分野にまたがって多彩な業績をのこされてきたことがわかります。

第1に地域経済論、とくに地域・都市政策、地域産業等に関わる研究であり、地方分権下での地域経済政策および地域産業政策の立案実行から市民参加による新たな公共政策形成の意義までを視野に入れた研究を重視されてきました。代表的な著作として、①『日本の企業立地・地域開発』（東洋経済新報社 1987年）、②『地域経済ビックバン』（東洋経済新報社、1998年）、③『静岡 未来への離陸』（ぎょうせい、2003

年), ④『川崎都市白書』(編共著, 専修大学社会知性開発研究センター, 2007年), ⑤『現代地域問題の研究』(編共著, ミネルヴァ書房, 2009年)等があげられます。第2の流通経済論関係では, 流通機構, 流通産業, 消費マーケティング論に関わる研究であり, マクロ経済における流通の意義, 流通サービス産業研究から, 行動経済学をベースとした消費者心理・行動分析, 消費マーケティングさらに国内外のマクロ消費分析まで幅広い研究に注力されてこられました。⑥『流通経済入門』(日経文庫, 1997年), ⑦『こんな時代でも売る——セールスマンバイブル』(監修, 小学館文庫, 2000年), ⑧『おまけより割引してほしい——値ごろ感の経済心理学—』(ちくま新書, 2006年), ⑨『お買い物の経済心理学——何が買い手を動かすのか』(ちくま新書, 2011年)等が代表作としてあげられます。第3の企業経営論関係では, 地域企業経営, 企業CSR, ソーシャル・ビジネスの社会的な意義ともかかわって, ⑩『ニュービジネスの経済学』(共著, 草文社, 1984年), ⑪『市民のためのコミュニティ・ビジネス入門』(編共著, 専大出版局, 2011年)等が代表作としてあげられるでしょう。学会活動では, 日本経済政策学会(理事), 日本計画行政学会, 行動経済学会, 企業と社会フォーラム等々に参加されてこられました。

以上のような研究上の成果を基盤としながら, 徳田教授は, 学外での活動にも積極的に参加されてこられました。すなわち, 東証一部企業の社外取締役への就任, NHK・朝日新聞・日本経済新聞をはじめ新聞・雑誌マスメディアへの取材対応, 日本テレビ・フジテレビ・テレビ朝日・NHK(TV・ラジオ)・テレビ神奈川への出演等々です。また, 社会的貢献活動として, 国土交通省におけるトラック運輸行政, 航空・空港行政への参与, 静岡県の静岡空港計画や, 川崎市経済労働局による産業振興計画, ソーシャル・ビジネス振興, 福祉製品補助事業, 農業推進計画(副委員長)等々への参与と, 実に多面的に社会的な役割を果たされました。

ご退職にあたっての感慨を綴ったつぎのようなメッセージをいただいております。

銀行員として職業人生を全うしようと思っていた矢先に, 思いがけない契機で

本学での研究・教育に携わることになったことは、その後の長銀の行く末を見るにつけ、とても幸運であったと感じています。金融業界に限らず教育の世界でも、取り巻く社会経済環境の激変の中で、常に難題を克服していかねばならないことを身をもって感じてきました。

ただ、小生のアドバンテージでもある、きわめてシビアな銀行取引の現場で鍛えられてきたことを背景に、学生たちが社会に出て行くにあたって必要なものとは何か、そのために教育者・研究者として何が必要かを念頭に置いて、学内教育や学内行政、そして対外的な研究・教育の場などを通じて、学生本位の教育を進めてきたと自負しています。そういった教育・研究機会を温かくふんだんに与えていただいた専修大学、同僚・同輩の皆さまには心より感謝しています。また、私の講義を聴いて巣立って行った多くの学生たちに対しても、彼らとの交流によって私が得たものも多く、感謝の気持ちで一杯です。

研究者としてはさらに追求すべきテーマを数多く抱えております。今後とも、大学・同僚・同輩の皆さまとはよろしく交流させていただきたいと念じているところです。

最後に、桃紅柳緑の季節、本学を退職された後もくれぐれもご健康に留意され、研究に対する変わる事のない横溢するエネルギーを発揮されるであろうことを願っております。そして、専修大学および経済学部の発展のために、折に触れてご協力いただけますようお願い申し上げます。以上、徳田賢二教授の古稀と定年での退職を心よりお祝いしつつ、これまで賜ったご指導への深謝の念をこめて私からの献辞といたします。

2018（平成30）年3月

専修大学経済学部長 内山 哲朗